

「今日の説教、聴き手のために」 2012/11/1

明治学院教会 (292)

(このプリントは毎週作っているものです)

牧師 岩井健作

「覚えられているということ」

詩編 106 編 1 節 - 5 節

選句「わたしを御心に留めてください」(4)

- 1、今日は、永眠者記念礼拝です。名簿の方だけでなく、それぞれに家族や親しい者たちを覚えて礼拝を守りたいと存じます。私事になりますが、私の父も亡くなって20年です。最後に「僕の生涯は感謝であった」という言葉を残して召されました。感謝で生涯を締めくくるとはキリスト者としては自然なことですが、そこには長い聖書の信仰の歴史が根底にあることを感じました。
- 2、先程お読した旧約聖書の詩編106編は、内容からいうと、イスラエル民族の神への反逆の歴史を思い起こしている部分が長いのですが、その暗い歴史を挟ん前後に「ハレルヤ」と神への讚美が歌われています。「旧約では歴史は第一に神の歴史であるから、讚美がわくとして出てくるのは当然である。」(関根正雄)と述べています。神の歴史の中に自分が覚えられるというのは、旧約聖書の人々の大きな願いでした。そのために「わたしに御心を留めてください」(4節)と祈っています。覚えられているという経験は私どもでも喜びですが、旧約聖書の人々には人生の存在意義そのものでした。
- 3、私は「記念会」というと忘れ難い経験があります。もう40年ほど前です。当時責任を持っていた教会で、一人のご婦人から30数年前失ったご長女の記念会を頼まれました。長い長い物語を一通りお聴きしました。自分は女学校の時、封建的な家の制度で、魂が窒息しそうになった時、親に隠れて密かに、街の教会で洗礼を受けた。結婚も養子をとらされて家を継いだ。夫はすぐれた学校の教師で有力な人であった。若い夫婦は、僻地校に責任者として赴任し、そこで長女が生まれ3歳で疫癘で亡くなった。骨は実家のお寺に納めた。しかし、自分にとっては、その最初の子が、神の御許に召されていて、自分を神様に繋ぎ留めている事を感じ、その後の年月を生き抜き、やがて教会のある街に住むことが出来、今日に至っている。いまでは夫も自分の信仰を認めてくれて、亡き子の記念会に賛成してくれた。その子は、「一粒の麦として」神と自分とを繋ぎとめていた存在であった。記念会でその事に感謝を奉げたいとのことでした。恵みに満ちた静かな記念会でした。後日談はさらに神の働きの恵の物語となります。
- 4、記念会は、わたしたちが、亡くなった方を覚えて何かをするという行事の日と思いがちですが、そうではありません。亡くなられた方が生前「信仰に生きたかどうか」ではなくて、その方の生涯をとおして「神が自分を覚えてくださること」を悟る日です。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、ただ一粒のままである。しかし、死んだなら豊かに実を結ぶようになる」という聖書の言葉を覚える日であり、また、亡くなった方を通して「私に御心を留めてください」と祈る日でもあります。